

遊休地を活用し経営規模拡大を目指す 都市近郊肉用牛経営

- 「頭と体を使うと肉用牛繁殖経営は儲かる」を夢に -

宮崎県宮崎市

長友 明（ながとも あきら）

長友真理子（ながとも まりこ）

注) 経営成績等をあらわす数値については、特に断り書きのない限り、平成14年実績（対象期間：平成14年1月1日～12月31日）の数値である。

1 地域の概況

宮崎県宮崎市は、県都として県の中央部に位置し、南北40kmにわたる海岸線を有し、黒潮の影響で冬季も温暖な気候に恵まれる一方で、台風などの厳しい自然条件がある。また、県の広域的な経済・文化の中心としての中核都市であるが、農業も基幹産業の1つとして足腰の強い農業経営の育成に努めている。

農地面積は、総面積の11.4%の3,254haで水田がその8割を占めており、水田地帯では早期水稻、施設園芸が盛んである。

平成14年度の農業粗生産額は、163億円で、水稻、施設野菜（キュウリ・ピーマン・トマト）、花きが主な作物となっている。また、畜産部門は全体の11.6%で、肉用牛はその約半分を占めている。

畜産農家戸数は、全農家戸数の7.1%に当たる275戸と少ないが、そのうち肉用牛飼養農家は9割となっている。

長友明、真理子さん夫妻の経営所在地である住吉地区は、近隣にシーガイア等の観光・リゾート施設のある海岸地帯に位置しており、砂地の畑が多く、施設園芸が盛んである。地区内の農家数は501戸でハウス園芸を主とする野菜・果樹経営が65%、水稻経営が29%、畜産農家は肉用牛のみ6%（31戸）となっている。

住吉地区においても、農家の高齢化・後継者不足が進行しており、周辺の都市化の影響もあって農家減少が大きい。こうした中で畜産については、生産性の高い経営の確立を目指すとともに、混住化が進む周辺状況から環境対策が重要となっている。

2 経営の概要

経営主の明さんは、農業高校に進み、高校2年生の時に行った農家研修先の主人から「頭と体を使えば儲かるのが肉用牛経営である」との教えを受け、いずれは肉用牛経営をやりたいとの夢を抱いた。その後、県農業大学校に進学し、昭和55年に大学校卒業と同時に後継者として就農した。就農当時の経営は園芸が主体であり、繁殖牛は5頭であったが、就農を機に「肉用牛経営を行う」という夢を実現するために両親を説得し、制度資金を活用して牛舎の建設と繁殖牛の増頭を図った。

就農と同時に農業青年の組織であるSAP（農業繁栄のための学修活動）にも積極的に参加し、県内の先進的な同業者や異業種の人たちとの仲間づくり・交流を通して肉用牛経営に対する意欲と確信は高まり、肉用牛部門をより一層拡大してきた。また、自らも地区SAP会長となるなど青年運動のリーダー役を果たしてきた。

借入金に頼らない堅実な経営を目指し、自己資金の対応が可能となった昭和62年、63年、2年続けて牛舎増築を行い、肉用牛30頭規模に拡大した。

平成元年、結婚と同時に経営移譲を受け、名実ともに経営の中心となった。

平成8年、労働力不足が重圧となってきたため、それまで、水稻、ハウス園芸（キュウリ、カボチャ）と肉用牛の複合経営の形態を専門化することとし、ハウス園芸と肉用牛のいずれを選ぶかを夫婦で真剣に検討し、経営の安定性、規模拡大の可能性から肉用牛専門経営を目指すこととした。同時に20aの水稻も中止し、翌平成9年には県単事業（補助率55%、残額12年間リース）で牛舎・たい肥舎・倉庫を建設した。専門化した後は増頭のスピードも上昇し、現在は繁殖牛100頭規模になった。

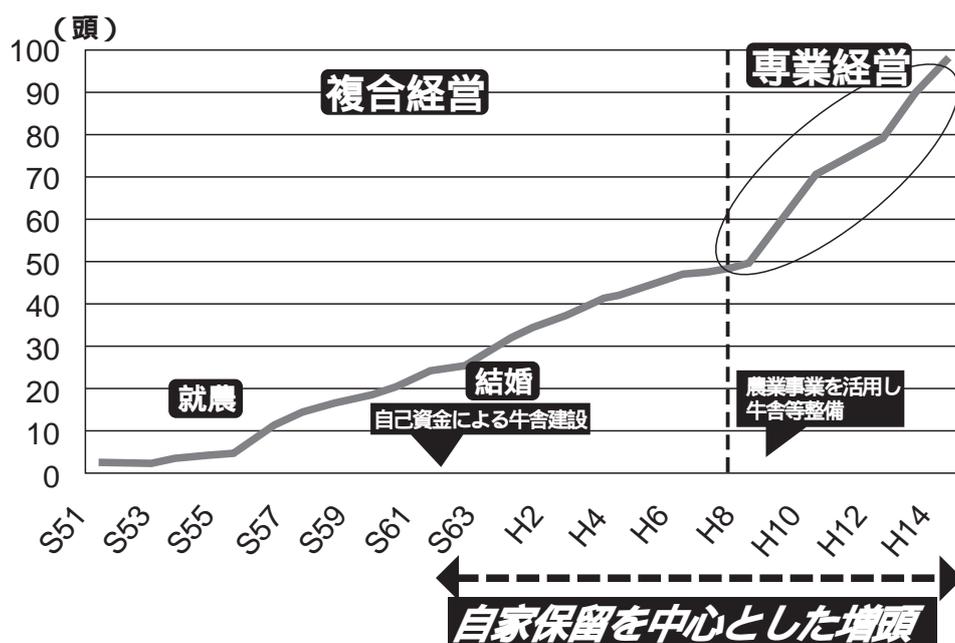


図 飼養頭数の推移

3 経営管理技術や特色ある取り組み

1) 自家産牛中心の規模拡大

当経営は、明氏が昭和55年の県農業者大学校を卒業後就農して22年の間に、繁殖牛5頭から98頭まで規模拡大した。

増頭にあたっては、能力の明らかな自家産牛を中心とし、急激な増頭はせず、経営の負担能力の範囲内で緩やか、かつ堅実に行っている（14年度末：繁殖牛98頭、うち自家生産牛78頭）。

繁殖牛については、農協から肥育成績の情報を収集しながら更新し、市場評価の高い子牛生産につながる優良繁殖雌牛群づくりを進めている。

2) 飼養管理技術

(1) 繁殖ステージに応じた牛舎のローテーション

繁殖成績の良否が経営を左右するとの考えから、分娩牛、授乳・種付け牛、妊娠牛を3群に分けて管理している。とくに授乳・種付け牛群はスタンション牛舎を利用することで発情確認を容易にしているとともに、パドック（5a）も併設しており、十分な日光浴とともに乗駕等による発情兆候を見つけやすくしている。

(2) 繁殖牛の栄養管理

繁殖牛の飼料は、乾草とイナワラを中心に、ビタミン不足による虚弱子牛の出生を防止するため、ルーサンペレットとビタミン剤入りの配合飼料（500g/日・頭）を給与している。

(3) 子牛の管理

出生日の近い子牛10頭前後を3～4ヵ月齢で集団離乳し、一群として管理することで、鳴き声を少なくさせることができ、近接住宅への騒音防止の効果をもたらしている。さらに集団管理による競い合いで飼料の食い込みが良くなるという効果もある。

また、子牛には、良質の粗飼料（チモシー、オーツヘイ）を多給し、十分な腹づくりを心掛けている。

(4) 廃用・更新牛の有利販売

高齢の廃用牛は、2つの方法により有利販売している。1つは3～6ヵ月間の飼いなおしを行い、肉牛として出荷する方法で、もう1つは評判の高い種雄牛で受胎させ、妊娠牛として販売する方法である。使い分けは妊娠牛の相場等を見て決めるが、多くは飼いなおしをする場合が多い。

(5) 肥育への取り組み

小型で繁殖に不向きな牛や産肉能力を確認するために仕向けした牛を肥育牛として常時5頭ほど飼養している。今後は繁殖牛の産肉能力を早期に確認するために初産子牛を肥育に仕向けるなど肥育部門の拡大を計画しており、平成16年から肥育牛舎の建

設に着手している。

(6) パソコンを利用した肉用牛および経営の管理

普及センターが行う研修に参加したのをきっかけとして、繁殖牛や子牛をパソコンによる管理に切り替えた。現在のところ、経営管理までには至っていないが、今後、経営管理や農協等が持っている肥育成績など各種のデータを活用して、生産性の向上や合理化に結びつけたいと考えている。

3) 効率的な粗飼料生産

都市化の進展と周辺農家の高齢化により生じた遊休地を中心に750 aを借地し、飼料畑面積920 a、成雌牛1頭当たり作付面積18 aを確保している。

飼料生産は、冬作イタリアンライグラス - 夏作メヒシバの作付体系をとっている。冬作のイタリアンライグラスは温暖な気候条件に適し、多回刈り可能であり、1番刈りの一部を青刈り利用するほかは、乾草として利用している。

夏作は、以前、トウモロコシのサイレージ利用を行っていたが、地域は砂地が多く乾燥するため、十分な収量を確保することが困難であった。そこで、地域で夏場に自生しており、生育旺盛で高収量が期待できるメヒシバに着目した。メヒシバは、もともと雑草であるが、牧草タイプで乾燥が早く、加えて、牛の嗜好性が高いという利点を持つ。栽培は、冬作の跡地に不耕起で施肥するのみという単純なものであることから、種子代が不用で、機械類も冬作と共有できるなど極めて低コストの粗飼料である。「手間のかからないのが最大の利点である」と長友さんは強調している。

倉庫の収容能力を超える粗飼料は、農地内でビニールスタックサイロにて貯蔵(2 t/基×10基)するなどしており、大規模経営にも関わらず、TDN自給率42%を達成している。また、周辺15.5haから56 tのイナワラも収集しており、イナワラを含めたTDN自給率は52%を達成している。

以上の結果、自給飼料のTDN当たり生産コストは49.5円となっている。なお、作業については、これまで自ら乾燥・集草梱包して貯蔵するという体系をとっていたが、乾燥期の労力がピークに達していたことから、平成16年より近隣3戸で飼料生産組合を結成してカッティングロールペーラーとラッピングマシンを導入し、省力化を図っている。

4) 真理子さんの貢献

労働力としては、年間20日余の臨時雇用のほかは、家族労働力のみである。妻の真理子さんは、平成元年の結婚直後から夫とともに飼養管理に従事し、女性の感性を生かした繁殖、哺育・育成管理を中心に行っている。また、農業団体に従事していた経験を生かし、経理処理と家畜個体管理といった安定的な経営を行ううえで必要なデータ管理を一手に担っている。今日の経営があるのはデータをもとに経営を支える真理子さんの貢献が大きい。

5) 環境改善の取り組み

近隣に観光・リゾート施設があり、観光客も多いことから環境保全には日常的に気を使っている。

敷料は、オガコを10%と近くのシメジ栽培会社から安価で購入できる廃菌床を90%利用している。廃菌床は分解が進んでいることから短期間で完熟たい肥に仕上げることが可能であり、臭気吸着効果もあわせ持ち、有効である。

また、牛舎に隣接するパドックは、全面コンクリート張りにしてふん尿の流出防止・完全回収に努めている。

6) 地域への貢献

平成12年に宮崎市和牛青年部会長に就いたのをはじめ、JA宮崎中央育種組合副組合長、同繁殖部会監事、宮崎市畜産振興会理事などを歴任し、地域の肉用牛振興を引っ張るリーダーの1人である。

また、経営周辺に存在する施設園芸農家の不作付地や高齢者の遊休農地を借地しており、地域の土地資源有効利用においても大きな役割を担っている。長友さん自身も自宅の近辺で比較的好条件での借地が可能となり、肉用牛経営へのメリットも大きい。平成12年からは、地区のヘルパー組合長に選出されており、セリ市時期には、自らも自家トラックを利用して高齢の農家等の子牛運搬を引き受けている。

さらに、高校時代の農家滞在研修が肉用牛経営を目指す動機となったことから、若い人とのふれあいを大切にしており、毎年、県内外から学生や後継予定者の研修を受け入れ、生活を共にしながらの後継者育成に努めている。

7) 経営実績(平成14年)

成雌牛の平均分娩間隔は12.4ヵ月と、約100頭という大規模経営としては優れた繁殖経営である。子牛販売頭数は68頭(雌31頭、去勢37頭)であるが、平均販売価格は雌396千円(市場対比108%)、去勢422千円(市場対比110%)で、ともに市場平均より高い。平成14年は1月から5月までBSEの影響が残り、前年比80%程度の子牛相場であったことを考慮すると、極めて高い販売価格と評価でき、長年の優良牛群整備の効果が現れている。

肥育牛4頭の販売を含め、年間総所得は12,725千円(成雌1頭当たり131,732円)所得率42.4%とBSEの影響が残る中で高い所得を確保している。

現在の借入金残高は7,373千円(成雌1頭当たり76,328円)と比較的少ない。内訳は、飼料作用の農地購入(3,725千円)、畜舎建設時の基盤整備費(1,683千円)が主なものであり、自家生産牛を中心とした規模拡大や牛舎にリースを活用するなど堅実な経営方針の下で、安定した経営を確立している。

4 経営・生産の内容

1) 労働力の構成

(平成14年12月現在)

区分	続柄	年齢	農業従事日数		年間 総労働時間	労賃単価	備考 (作業分担等)
				うち畜産部門			
家族	本人	42	330	330	1,980	1,000	飼養管理、飼料生産等
	妻	39	330	330	1,650	1,000	飼養管理、経理等
	長女	12					
	長男	11					
	次女	8					
	母	72	330	330	1,320	1,000	飼料給与(分娩.つなぎ)
常雇							
臨時雇	のべ人日 22人				170	1,000	
労働力 合計	2.3 人		990 日	990 日	5,120 時間		

2) 収入等の状況

(平成14年1月～平成14年12月)

区分	種類 品目名	作付面積 飼養頭数	販売量	販売額・ 収入額	収入 構成比
農業生産部門収入	子牛販売収入	96.6	68頭	27,876,900円	78.6%
	肥育牛販売収入		4頭	2,117,377円	6.0%
	奨励金等			5,471,398円	15.4%
	計			35,465,675円	100.0%
	耕種				
	林産				
	加工・販売 部門収入				
農外収入					
合計				35,465,675円	100.0%

3) 土地所有と利用状況

区 分		実 面 積			備 考	
			うち借地	うち畜産利用地面積		
個別 利用 地	耕 地	田	20a	0a	20a	飼料作付け
		畑	900a	750a	900a	
		樹園地				
		計	920a	750a	920a	
	耕 地 以 外	牧草地				
		野草地				
		計				
	畜舎・運動場	40a	0a	40a	うち運動場 5 a	
	そ の 他	山 林				
原 野						
計						
共同利用地						

4) 家畜の飼養状況

単位：頭

品 種 区 分	黒 毛 和 種				
	成雌牛	子牛	育成牛	肥育牛	
期 首	93	61	5	4	
期 末	98	63	1	4	
平 均	96.6	62.9	2.8	5	
年間出荷頭数		68		4	雌子牛 5頭保留

5) 施設等の所有・利用状況

種類	構造 資材 形式能力	棟数 面積数量 台数	取得		所有 区分	備考 (利用状況等)	
			年	金額(円)			
畜舎	牛舎	木造	100 m ²	S. 54	1,000,000	個人	繁殖牛 繁殖牛 つなぎ牛舎
	牛舎	木造	100 m ²	S. 62	1,500,000	〃	
	牛舎	木造	200 m ²	S. 63	4,500,000	〃	
	牛舎	鉄骨スレート	460 m ²	H. 9		リース	
	牛舎	鉄骨スレート	400 m ²	H. 9		〃	
施設	倉庫	木造	110 m ²	H. 3	2,351,000	個人	
	たい肥舎	ブロック	100 m ²	H. 9	1,500,000	〃	
	倉庫・たい肥舎	鉄骨スレート		H. 9		リース	
	敷地舗装	セメント		H. 8	3,500,000	個人	
	敷地用壁	セメント		H. 9	1,365,000	〃	
	カーテン柱			H. 9	525,000	〃	
機械	トラック	2t ロック	1台	H. 2	2,500,000	個人	
	ベアラー		1台	H. 4	1,300,000	〃	
	マニュアルプレッダー		1台	H. 3	1,000,000	〃	
	モアー		1台	H. 8	368,000	〃	
	モアー		1台	H. 12	450,000	〃	
	カッター		1台	H. 8	373,000	〃	
	ボブローダー		1台	H. 9	2,450,000	〃	
	ライムソワー		1台	H. 12	240,000	〃	
	プロトキスター		1台	H. 12	250,000	〃	
	フレームハーベスター		1台	H. 13	843,000	〃	
	ヘイメーカー		1台	H. 10	535,500	〃	
	軽トラック	550cc	1台	H. 13	1,060,375	〃	
	トラクター	26ps	1台	H. 13	1,200,000	〃	
	パソコン		1台	H. 14	317,450	〃	
	洗浄動噴		1台	H. 12	114,000	〃	
	ブロアー		1式	H. 15	1,428,000	〃	
ショベルローダー		1台	H. 15	3,705,000	〃	補助率 55%	

このほか、平成16年に3戸で立ち上げた飼料生産組合でカッティングロールベアラー、ラッピングマシン等を共有。

6) 自給飼料の生産と利用状況

(平成14年1月～平成14年12月)

使用 区分	飼料の 作付体系	地目	面積 (a)		所有 区分	総収量 (t)	10a 当たり 年間収量 (t)	主 な 利用形態 (採草の場合)
			実面積	のべ 面積				
採草	イタリアンライグラス	田	20	20	自己	12	6	1 番草：青草 2 番草：乾草
採草	イタリアンライグラス	畑	900	150	自己	90	6	1 番草：乾草 (一部青草)
				650	借地	390	6	2 番草：乾草
採草	メヒシバ(野草)	田	20	20	自己	10	5	1 番草：青草 2 番草：乾草
採草	メヒシバ(野草)	畑	900	150	自己	75	5	1 番草：乾草 (一部青草)
				750	借地	375	5	2 番草：乾草
計			920	1,740		952		

8) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績

期 間		平成 14 年 1 月～平成 14 年 12 月		経営実績	
経営の概要	労働力員数 (畜産)	家 族		2.25 人	
		雇 用		0.1 人	
	成雌牛平均飼養頭数			96.6 頭	
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種		5 頭	
		交雑種		0 頭	
		乳用種		0 頭	
	飼料生産延べ面積			1,740 a	
	年間子牛販売・保留頭数			73 頭	
年間肥育牛販売頭数	肉用種		4 頭		
	交雑種		0 頭		
	乳用種		0 頭		
収益性	年間総所得			12,725,311 円	
	成雌牛 1 頭当たり年間所得			131,732 円	
	所得率			42.4 %	
	成雌牛 1 頭当たり	部門収入			310,810 円
		うち販売収入			288,581 円
		売上原価			246,239 円
		うちモト畜費			23,236 円
		うち購入飼料費			92,410 円
うち労働費			53,313 円		
うち減価償却費			31,233 円		
繁殖	成雌牛 1 頭当たり年間子牛販売・保留頭数			0.76 頭	
	平均分娩間隔			12.4 ヶ月	
	受胎に要した種付回数			1.31 回	
	雌子牛 1 頭当たり販売・保留価格			382,358 円	
	雌子牛販売・保留時日齢			323 日	
	雌子牛販売・保留時体重			268 kg	
	雌子牛日齢体重			0.831 kg	
	去勢子牛 1 頭当たり販売・保留価格			421,845 円	
	去勢子牛販売・保留時日齢			283 日	
	去勢子牛販売・保留時体重			269 kg	
	去勢子牛日齢体重			0.951 kg	
	生産性	肥育開始時	日齢		344 日
			体重		269 kg
肥育牛 1 頭当たり		出荷時月齢		33 ヶ月	
		出荷時生体重		537 kg	
平均肥育日数			647 日		
販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体重 (DG)			0.415 kg		
対常時頭数事故率			0 %		
販売肉牛 1 頭当たり販売価格			529,344 円		
販売肉牛生体 1 kg 当たり販売価格			986 円		
枝肉 1 kg 当たり販売価格			1,540 円		
肉質等級 4 以上格付率 ※			25 %		
モト牛 1 頭当たり導入価格			331,750 円		
モト牛生体 1 kg 当たり導入価格			1,234 円		
粗飼料		成雌牛 1 頭当たり飼料生産延べ面積			18 a
		借入地依存率			85.4 %
	飼料 T D N 自給率			42 %	
成雌牛 1 頭当たり投下労働時間			53 時間		
安全性	総借入金残高 (期末時)			737 万円	
	成雌牛 1 頭当たり借入金残高 (期末時)			76,328 円	
	成雌牛 1 頭当たり年間借入金償還負担額			29,197 円	

(2) 技術等の概要

繁殖部門

経営類型	繁殖・肥育混合経営（繁殖主体）
飼養品種	黒毛和種
放牧の有無	なし
自家配合の実施	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器等共同利用の実施	飼料生産用機械の共同利用 （平成16年4月～）
生産部門以外の取り組み	なし
E T活用の有無	なし
繁殖牛へのサイレージ給与	一部期間

肥育部門

主な飼養品種	黒毛和種
飼養方式	ストール
自家配合の実施	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器等共同利用の実施	なし
生産部門以外の取り組み	なし
肥育の目標	肉質重視
預託肥育牛の割合	0%

5 経営・活動の推移

年次	作目構成	頭(羽)数	経営および活動の推移
昭和51年	肉用牛 水稲 ハウス (キュウリ・カボチャ)	繁殖牛2頭	高校2年生の時に市内の肉用牛農家で研修を行う
昭和55年	〃	繁殖牛5頭	県立農業大学校(肉畜学科)を卒業し就農 育成牛5頭導入(後継者資金300万借入れ) 繁殖牛舎(10頭収容)建設(近代化資金100万借入)
昭和57年	〃	繁殖牛14頭	ハウスを連棟式に改築(暖房付・面積20a)
昭和62年	〃	繁殖牛25頭	牛舎建設(自己資金150万)し、肉用牛を増頭する
昭和63年	〃	繁殖牛30頭	牛舎建設(自己資金450万)し、肉用牛を増頭する
平成元年	〃	〃	本人が結婚。経営移譲される。
平成3年	〃	繁殖牛40頭	マニュアルプレッダー・コーンハーベスター購入
平成8年	肉用牛	繁殖牛50頭	労働力不足によりハウス部門を中止し、肉用牛専業となる。トラクター更新
平成9年	〃	繁殖牛60頭	県単事業「中核的肉用牛経営体創設事業」で牛舎等建設 繁殖牛舎 (460 m ²) 980万 育成牛舎 (400 m ²) 780万 堆肥倉庫舎 (110 m ²) 214万 自家保留で繁殖牛の増頭を図る 繁殖牛の除角を行う
平成10年	〃	繁殖牛70頭	パソコンで母牛個体管理を始める
平成12年	〃	繁殖牛80頭	宮崎市和牛青年部会長・ヘルパー組合長に就任
平成14年	〃	繁殖牛98頭	

6 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

1) 家畜排せつ物の処理方法

繁殖関連牛舎は1週間ごと、また子牛育成舎は15日～30日ごとにショベルでたい肥舎に搬出している。パドックのふん尿は、乾燥を確認しながら定期的に戻したい肥として利用している。

敷料には、オガコのほか、シメジの廃菌床を廃物利用している。

< 敷料の購入量と金額 >

シメジ生産廃菌床	200m ²	100,000円
オガコ	10m ²	20,000円
カンナ屑	7m ²	無 償

牛房は、直下型扇風機を設置して換気を行うとともに、除湿により敷料の日持ちを長くさせている。

たい肥舎に搬入するふんの水分調整として、パドックの戻し堆肥を利用している。

たい肥舎(80m²)は、発酵促進のためプロアーを設置し、3槽に区分している。

1槽に20日間発酵させた後、切り返しを兼ねて次の槽にショベルで移動させ、60日間発酵させる。

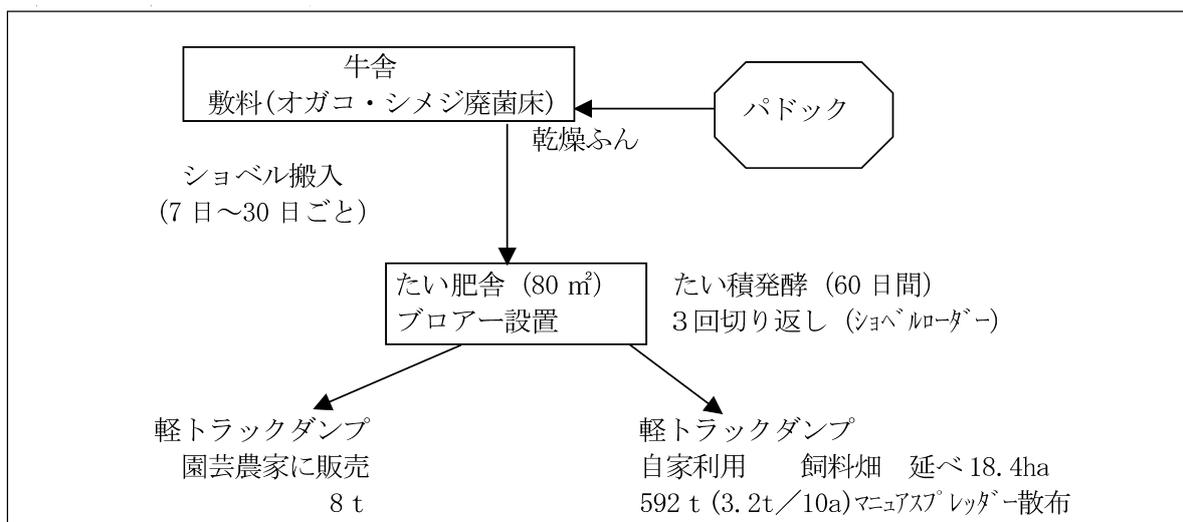
完熟たい肥は、軽トラックダンプで圃場に運び、マニュアルスプレッダーで散布の後、ロータリーで耕うんし鎮圧する。

なお、忙しい時には、たい肥運搬等の作業をオペレーターに依頼している。

2) 家畜排せつ物の利活用

内 容	割合 (%)	品質等 (たい肥化に要する期間等)
販 売	1	品質が良いとの評価を受けている。 たい積発酵約2ヵ月
自家利用	99	たい積発酵約2ヵ月

3) 処理・利用のフロー図（平成15年現在）



4) 処理・利活用に関する評価と課題

(1) 宮崎県審査委員会の評価

敷料にシメジの廃菌床を利用しているため、敷料費の経費節減につながっているとともに、廃菌床の持つ菌により発酵が促進されているため60日と短い期間に完熟たい肥になっている。

当経営は、混住地域にあるので害虫発生防止や悪臭対策のために、たい肥発酵槽にブローアを設置して完熟たい肥生産に努めている。

パドック（全面コンクリート張り5a）のふんは乾燥した時にショベルで集ふんし、牛舎に投入し水分調整として利用している。

生産されるたい肥は、飼料作付時期を調整しながらたい肥散布しており、ほぼ100%自家利用している。

少量のたい肥を園芸農家に販売し、品質は良いとの評価を得ており、他の園芸農家からも要望があるが、散布する労働力がなく断っている現状がある。

(2) 課題

たい積発酵施設で処理されたたい肥は、圃場に散布し耕うんしているが、梅雨のような長雨時に対応するため、一定量の貯留施設を設置する必要があった。平成16年現在、新たなたい肥舎の建設に着手しており、この課題もまもなく解決される。

5) 畜舎周辺の環境美化に関する取り組み

- ・ 近くに住宅が隣接しているので、牛舎のボロだしや清掃には気をつけている。
- ・ 畜舎周辺に垣根（一葉）を設け、花木（アジサイ）を植栽し環境美化を行っている。

7 経営の継続性～後継者の状況等

- ・ 経営主は、まだ40代前半と若く、子どもがまだ小・中学校のため課題がない。
- ・ 休日の午前中には、長女をはじめ3人の子どもがよく手伝いをする。

8 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

就農以来、SAP活動（農業繁栄のための学修）に積極的に参加し、住吉地区会長として活動発表や自主的学修活動と仲間づくり・交流を通して肉用牛経営確立の参考としてきた。

平成12年に地域組織の役員就任を皮切りに現在では、JA宮崎中央繁殖部会監事、同育種組合副組合長、宮崎市畜産振興連合会理事等の役員に就任し地域の肉用牛振興のリーダーでもある。

この地域は集約型の園芸農家や高齢農家が多く、さらに都市化の進展もあり、不作付地や遊休農地などが多い。その中で数少ない土地利用型経営として粗飼料生産用に7.5haの借地を行い、地域の土地利用向上に大きな役割を果たしている。

以前、複合で行っていた園芸は中止しているが、部会組織から脱退せず年1回の研修旅行には参加など仲間づきあいを大切にしている。

毎年、県農大生や県内外の新規就農希望者を1～6ヵ月の間、研修生として受け入れ、後継者育成に尽力している。また、これまで国や県の職員研修も受け入れしている。

地域のまつりや懇親会では、宮崎牛の美味しさのPRと消費拡大のために率先して焼肉パーティーを提案し実施している。

長男はラグビークラブに入会しているが、本人はクラブチームの指導者として、忙しい飼養管理の時間を割き、土・日曜日にコーチとして参加している。

9 今後の目指す方向性と課題

(1) 繁殖雌牛群の資質向上と系統整備

母牛群の整備にあたっては、産子の産肉性の向上を図るため、子牛の市場評価が高い安平・福桜系に集約し、体の大きい母牛に更新していく（現在は、安平系30%・福桜系30%・安平系×福桜系10%・その他30%）。

(2) 繁殖管理の改善

徹底した個体管理と発情発見のため、朝夕の観察の他に真夜中に繁殖牛の見回りをするなどしており、ほぼ年1産を達成している。

今後は、更なるワクチネーションと衛生管理の実施により死産・流産（4頭）と子牛事故（2頭）を0に近づけたい。

(3) キャトルステーションを活用した増頭

JAが建設した施設（繁殖農家が離乳から子牛出荷まで有料で預託）であるキャトルステーションを利用できるのは、現在のところ、建設地区の国富地区のみであるが、対象地区が拡大すれば契約したいと考えている。それにより牛舎に余裕ができるので繁殖牛の増頭を図りたい。

(4) 肥育部門の拡大

肥育牛は、小型で繁殖に不向きな牛、枝肉成績の確認を期待する牛など常時5頭程度を飼育している。今後は繁殖牛の産肉能力を早期に確認するため、初産子を肥育に仕向けるなど肥育部門を50頭程度に拡大することを計画しており、平成16年から新肥育牛舎の設計・建設に着手している。

(5) パソコンを活用した経営管理

数年前からパソコンを活用、現在のところ繁殖牛、子牛の生産管理をおこなっているが、さらに技術を修得して経営の管理まで行い効率の高い経営を確立したい。

(6) 年間所得の向上

以上のような取り組みを行うことで、年間所得の向上を図り、目標を2,200～2,300万円に設定している。